

民間信仰における儒教と道教 中国・台湾・琉球

Confucianism and Taoism in Folk Religion:
China, Taiwan and the Ryukyu Kingdom

坂出祥伸

【論文要旨】

中国のすべての思想は「気」の観念が根底にある。「気」は身体的なものであると同時に社会的なものでもあり、「宗族」という始祖を同じくする同姓の父系血縁共同体の成員を結びつけるものである。同族の先祖祭祀や「孝」の觀念もまた、この「気」の觀念に根ざしているのであり、祀られる先祖と祈る子孫との間で「気」の「感應」が生ずることによって、子孫に福がもたらされ繁栄する。このような先祖祭祀や「孝」は、儒教固有のものではなくて、仏教でも道教でも共有している。しかしながら、北宋時代に始まる科挙出身による官僚制は士大夫階層のありかたを大きく変革させることになり、ここに古代から存続していた宗族制の再編強化が行われるようになり、近世儒教の礼制が形成されて明清以降の士大夫社会の基本的なありかたができあがる。一方、小説に登場する人物やその行動から考えると、一般民衆はもとよりのこと、儒教の担い手である士大夫官僚ですらも、「怪力亂神」に依存するのが実情であった。例えば、「風水」はすぐれた「気」の流れている場所を選んで、そこに墓地や住宅などを設けるのであるが、士大夫たちは自分の宗族の繁栄や自身の立身出世を願って風水に熱中するようになる。こういうことから分かるように、儒教には裏と表、建て前と実際とは乖離しているというべきである。実情は道教的世界に依存しながらの生きかたであった。